Rotary 第2530地区

2025-2026 Weekly Report
郡山アーバンコスモスロータリークラブ

第2530地区ガバナー 泉田 征慶　会長 宮﨑 登志行　幹事 渡邊 万里子

第26回例会

通算第 1261 回例会 2026 年 2 月 18 日(水)

12:30～13:30 郡山ビューホテルアネックス

▶ **開会点鐘**

▶ **ロータリーソング「それでこそロータリー」斉唱**

▶ **四つのテスト唱和：佐藤武司さん**

▶ **宮﨑登志行 会長 挨拶**

先週土曜日の中央分区 IM に参加していただいた皆様ありがとうございました。我々の 30 周年に向けて考えなくてはいけないところが多々あると改めて思いました。今日はロータリー在籍 30 年表彰を受けられ、30 周年実行委員長である土屋繋之先生の卓話を頂戴します。ぜひ 30 年の歴史を改めて皆さん一人一人心に留めていただければと思っております。

▶ **出席報告：渡邊万里子 幹事**

会員数 43 名、出席 23 名、欠席 20 名、出席率は 53.49%です。

▶ **スマイルBOX報告：増子ふみえ 委員長**

宮﨑登志行会長、土屋繋之さん、片桐栄子さん、齋藤健二さん、鈴木かおるさん、寺山幸徳さん、平栗幹也さん、渡邉孝子さん、味戸誠一郎さん、蔭山寿一さん、津野順子さん、小林悦子さん、佐藤功一さん、橋本弘幸さん、星相ノ介さん、増子ふみえ、16 名からいただきました。

▶ **幹事報告：渡邊万里子 幹事**

郡山アーバンコスモス RC のタスキが出来上がりました。名札も新調しました。

4 月 24～30 日は世界予防接種週間で、40 年前に世界と交わしたポリオのない世界を作るという約束を果たすためにワクチン接種に対する理解を深め、寄付をお願いします。

プログラム：会員卓話

▶ **土屋繋之 30 周年特別委員会委員長**

「ロータリー在籍 30 年表彰を受けて」

新年会で話しているうちに内田さんから 2 月の例会で卓話をしてほしいと言われまして、プログラム委員長から題名を決めてほしいということで、地区大会でロータリー在籍 30 年表彰をいただきましたのでとりあえずこの題にしました。30 年を振り返るような話を期待されているようですが、今は RLI がありますし、会長になる前には PETS がありますから、ロータリーのことは私が話すまでもないかもしれません。

私の父は 2003-04 年にガバナーでしたが、その前の 2002-03 年にガバナーをされた福島 RC の阿久津肇さんは、80 歳になられたときに「ロータリーに専念する」と言って自分のクリニックを閉じられました。その方が新入会員にロータリーのことを教えるために作られた冊子を私はいつも持って歩いています。今日の内容はほとんどこの中に書かれていることです。郡山アーバン RC ができるときに、郡山南 RC から 4 人がキーメンバーとして移籍しました。その 4 人のうち 2 人が亡くなり、1 人はご高齢で、1 人が私ということなので、30 周年記念の実行委員長としても責任を感じています。

ロータリーとは何でしょうか。私は郡山南 RC に 40 歳のときに入りました。例会に行くと必ずメンバーがそばにきて「ロータリーとはね」と話し始めました。ロータリーとは何ですかと聞かれたときに、奉仕団体ですとか、自分の職業に誇りを持って集まっている仲間ですとか、いろいろな答え方があると思いますけど、紐解いてみると、ロータリーとはお互いを助け合うために集まってできた究極の互助組織だということです。皆さんご存知のとおり 1905 年 2 月 23 日に弁護士のポール・ハリス、石炭商人のシルベスター・シール、鉱山技師のガスターバス・ローア、仕立屋のハイラム・ショーレの職業を持つ 4 人が集まってロータリーは始まりました。当時のシカゴはすごく荒れたひどい町でした。しかもこの 4 人はシカゴ生まれではなく他の土地からシカゴという大都会に来て起業した人たちでした。親しい友人もなく、生活でも仕事でも信頼できる人がなかなか見つからない、相談する相手もいないという状況の中で、4 人が集まって始まったということです。

ロータリーは基本的には職業人の集まりです。私たちは誰かに必ずどこかで助けられて仕事をしています。助けてくれる誰かが社会的に信用できるメンバーだとしたら、これほどありがたいことはありません。私たちは助けてくれる人たちをどう選んでいくかということを考えながら仕事をしているのではないかと思います。信用できる相手に巡り合えれば仕事がうまくいきます。下手をすると騙されたり、仕事を持っていかれたり、つらい目に合わされたりすることも、当たり前に世の中はあると思います。そうすると、仕事をする上でのパートナーをどういうふうに選ぶかということが非常に重要な鍵ではないかと私は思っています。

ロータリーが立ち上がった翌年の 1906 年 4 月にドナルド・カーター事件がありました。シカゴクラブへの入会を勧められたカーターさんが「職業をもって社会に貢献することが自分が存在する証であり、自分たちの利益にこだわって社会的に何もしない団体に将来性も魅力もない」と言って入会を断ったという事件です。自分たちの仲間内だけで互助的な活動をしても、それはあくまでも自己満足の世界であって、社会的な奉仕をしなければその活動は社会的に認めてもらえないと言って入会を断ったということです。それまでのシカゴクラブの定款は 2 つしかありませんでした。第 1 条は本クラブは会員の事業上の利益の増大です。先ほど言った互助組織です。第 2 条は通常社交クラブに付随する親睦およびその他の特に必要と思われる事項の推進でした。仲良くやっているうちに、仕事に活用できるところがあれば、それをどんどん広めようというようなことです。

基本的にお互いの利益を生むための組織だったクラブが、ドナルド・カーター事件が起きたゆえに、第 3 条として、シカゴ市最大の利益を推進し、シカゴとしての誇りと忠誠心を市民の間に広めることという条項を加え、初めて奉仕という理念が定款の中に導入されました。地域に根差した活動をし、地域の皆さんに認識してもらえるような団体がロータリーであるという考え方が、創立してたった 1 年で奉仕という概念ができたということです。ロータリーの公式標語“Rotary Mottos”の①は“Service above Self”：超我の奉仕です。「自分の利益を求めてクラブに入会するのではなく、利益をもたらす相互取引を会員以外に拡げていく」とされ、基本的には互助組織で、利益をそれに値するメンバーにも拡げていきましょうということです。公式標語の②は“One profits most who service best”：最も奉仕するもの最も多く報いられる「自分の職業に対する評価は返ってくる対価ではなく信頼であり、そのことは自分を成長させてくれる」とされ、奉仕することで返ってくることは、信頼を得ることによって自分自身が報いられるという奉仕の概念が生まれてきたということです。

今は奉仕をするという意思を持つ人が入会してきますが、以前はクラブに選ばれた人が会員になりました。1 業種 1 人として、1 つの業種に 1 人しかいませんでしたので、そこで活動する以上は皆さんに迷惑をかけずに、職業を代表する 1 人のメンバーとして、クラブに選ばれた誇りを持って活動していたと思います。でも会員拡大のために会員資格が緩和されてきました。会員は増えたかもしれないけど、そのような意識がなくなってきたように思います。また、職業分類はあまり関係なくなりました。私の妻が会員だったときの職業分類はハウスキーパーでした。職業分類の一覧表が年次計画書にあります。昔は職業分類委員会がありました。クラブにとってどんな職業の人が入ってくれるか、利益を得ることができるかということを委員会で議論していたわけです。ある業種の人が欲しいというと、その業界の中で誰がいいかということをみんなでリサーチして、その人には伝えずにクラブの会議にかけ、1 人でも反対の人がいるとその話は無しにするわけです。その人が知らないうちに審議されるのですから、その人は何も傷つかないわけです。昔のやり方のほうが、実はそれなりの社会的な活動をしている人に迷惑をかけないのかなと思っています。「現在ロータリークラブ会員資格は“奉仕の意思を持つ者”である。以前は“クラブに選ばれし者”が会員となれた。この違いはロータリーの本質を大きく変えた」とあります。選ばれた人たちといろんな話ができ、自分に足りないところとか、新しく気づかされることを仕事に役立たせることができるのが例会のスタンスです。

2013-14 年に私が郡山アーバン RC にいて、ガバナー補佐を仰せつかりました。その時のガバナーが渡邉公平先生です。ガバナーは「例会のあるべき姿をとにかく訴えてください。例会に出席することを勧めてください。ロータリーは例会に出席することがないと本来の意味を成しません」と盛んに言っていました。「ロータリーの根本精神は『奉仕の理想』にある。例えれば籠の中に水を入れるのではなく、水の中にカゴを入れていればよい。つまり奉仕の中に心を漬ければ奉仕の心が身に付く。」つまり自分から奉仕をしようとする気持ちで動くのではなく、奉仕をするところに自分が参加して、奉仕の意味をどこかで感じているうちに自分も奉仕をしたくなる。だからいろんなところに出席することが大切です。例会に出席して話を聞いて、一言でも二言でも頭に残して帰れば、何かしら知識の糧になるというようなことを言っていました。「例会出席は心を磨くためにあるのではない。聞き忘れ、読み忘れ体験を通して他の人の話を謙虚に聞いて心が磨かれ真のロータリアンになれる」それから「心を求めて例会に参加 境地を得て例会を去る」は、いろんなところに出てくる言葉です。

2002-03 年の RI のビチャイ・ラタクルさんは、RI 会長の中でも非常に評価の高い会長の 1 人です。ラタクル RI 会長が 20 年以上前に「近年世界中でロータリー会員が減少しているのはご承知の通りです。私達は恐らく絶望的になり、会員増強のためにロータリー会員としての心と魂と理想を忘れて、なりふり構わず会員増強に走りました。我々は職業分類の原則を無視しました。会員の適格条件に注意を払わず、新会員がクラブに入る前にもロータリー情報を十分に説明しませんでした。出席の必要性や友情、奉仕を強調、説明するのを怠ってきました。」と言っています。今はあまり行われていないようですけど、入会が決まると会長を含めて説明する場を設けて、会食しながらロータリーのいろはを聞いてもらうなどの受け入れる努力をしてきましたし、出席することが非常に大切と言われてきました。「現在、世界の多くのロータリーにおいて、クラブが量に重点を置き、会員の資格、適正と質の両方を無視している事実を憂慮しています。したがってこの不変の原則を守らず、我々は不変の価値を失いました。間違いなく、ロータリークラブは生きている組織です。全ての組織体と同じく、成長しなければ滅亡することを私は認めます。成長が停止した時に衰退が始まります。しかし、成長の話をするに当たり、配慮しなければならないことは、単に会員の数を増やそうとするのではありません。ロータリーを自ら前進させ、ロータリーの理想に触れて自ら磨くことのできる高い資質を有する人が必要なのです。新会員が適正な教育を受けずに入会すれば、会員は増加するかも知れませんが、ロータリークラブとしては間違いなく死滅します。何故ならばそのクラブは最早その地域を代表する職業人の集まりとは言えないからです。その価値がなくなります」と 20 年くらい前の会員が減ってきた頃にビチャイ・ラタクルさんが書かれた文章を皆さんに読んでいただきました。
例会に出てきてお互いに話をする機会が薄れてきていることをどう改善するかということが、郡山アーバンコスモス RC が素晴らしい会員を得て、活発な活動ができる大きなクラブにつながるのではないかと思っています。